

ダニエル書 - 第五十五番

預言のタペストリーを解き明かす：ガブリエルのダニエルへの啓示

Jeff Pippenger

2024-01-19

ダニエルがエレミヤの預言における七十年の捕囚と、モーセの誓いと呪いを悟った後、ガブリエルがダニエルのもとに来た。

彼の治世の第一年に、私ダニエルは、主の言葉が預言者エレミヤに臨み、エルサレムの荒廃が七十年で満ちることについて、書物によってその年数を悟った。……まことに、イスラエルは皆、あなたの律法に背き、あなたから離れ去って、あなたの御声に聞き従わなかったのです。のろいが私たちの上に注がれ、神のしもべモーセの律法に書かれている誓いも私たちの上に臨みました。私たちが主に罪を犯したからです。主は、私たちおよび私たちを裁いた者たちに対して語られた御言葉を、大いなるわざわいを私たちにもたらすことによって確かなものとされました。天の下で、エルサレムになされたことほどのことは、かつて行われたことはありません。モーセの律法に書かれているとおり、これらすべてのわざわいが私たちの上に臨みました。それでもなお、私たちは私たちの神、主の御前に祈りをささげて、私たちの不義から立ち返り、あなたの真理を悟ることをしませんでした。それゆえ主はこのわざわいを見張っておられて、これを私たちの上にもたらされました。私たちの神、主はなさるすべてのわざわいにおいて正しい方だからです。私たちはその御声に聞き従わなかったのです。ダニエル書 9:2、11-14。

ダニエルが用いた「誓い」と訳されている語は、レビ記26章でモーセが用いた「七たび」と訳されている語と同じである。ホワイト夫人は、第9章でダニエルが、エレミヤの七十年の期間と二千三百年の期間の関係を理解しようとしていたと知らせている。ガブリエルは第8章で二千三百日の幻をダニエルに悟らせるよう命じられており、第9章で戻ってきたときにその務めを仕上げ、第7章、第8章、そして第9章の主題となっている二つの幻を心の中で区別するようにとダニエルに告げた。その二つの幻は、1798年に封印が解かれた「知識の増大」の主題である。

エレミヤの七十年とモーセの「呪い」は、いずれもモーセの「誓い」によって表される「七つの時」の象徴であるが、ガブリエルは二千三百年という期間の内訳を提示しようとしている。それは、蹂躞の幻（"chazon"）と出現の幻（"mareh"）との関係が正しく区別されたときにのみ、正しく区分することができる。ガブリエルはまず、ユダヤ人に四百九十年の猶予の期間が与えられていることを示した。その期間は、七十年の捕囚を生み出した背きの四百九十年の期間と同じであった。

二十四節の"determined"という語は、紀元前457年に第三の勅令が発せられてから西暦34年のステパノの石打ちに至るまでの期間を指しているが、二十六節と二十七節の"determined"は、異教と教皇主義の荒廃させる勢力を指し示している。

そして六十二週ののち、メシアは断たれるが、彼自身のためではない。やがて来る君の民が都と聖所を滅ぼし、その終わりは洪水とともに来る。戦いの終わりに至るまで、荒廃が定められている。彼は一週のあいだ多くの者と契約を堅くし、その週の半ばにいけにえと供え物をやめさせる。忌むべきものはびこるゆえに、彼はそれを荒れ果てさせ、ついに終わりに至るまで、定められたものが荒れすたれた者の上に注がれる。ダニエル書 9:26, 27.

「メシア」が「断たれた」その「後」に、「来るべき君の民が都と聖所を滅ぼす」とガブリエルはダニエルに告げている。異教ローマは西暦66年から70年までちょうど三年半続いた包囲戦において、「都と聖所」を滅ぼした。ガブリエルは、「戦いの終わり」は「洪水をもって」訪れ、その戦いは「荒廃」から成ることを明らかにしている。エルサレムと聖所に対して遂行された戦いは、異教主義と教皇主義によってもたらされた踏みにじりであった。初めにエルサレムを滅ぼす異教の勢力はバビロンであったが、メシアが十字架に付けられた後にそれを滅ぼす異教の勢力は異教ローマであった。しかし、聖所と軍勢に対する戦いは二つの荒廃させる勢力によって遂行され、そのうち聖書における第二の荒廃の勢力は教皇制である。

教皇権は「溢れ流れるむち」として表される権力であり、ダニエル書11章40節にある「溢れ出て通り過ぎる」権力である。バビロンに始まり、申命記でモーセによって示された暗い言葉を語る鉄の国へと続いたエルサレムの踏みにじりは、その後、教皇権によって引き継がれた。踏みにじりが終わるまで、「荒廃」は「定められて」いた。27節で、キリストは一週の間、多くの者と契約を確証する。その週の半ばに、キリストが天の聖所で大祭司としての務めを開始されたことにより、地上のいけにえの制度は終わりとなった。彼らに割り当てられていた猶予の時にユダヤ人が不従順であったため、聖所と都は再び荒廃させられることになった。

その節はこう述べている。「忌むべきものはびこるゆえに、彼はそれを荒れ果てさせ、終局に至るまで、定められた裁きが荒らす者の上に注がれる。」ユダヤ人がついに猶予の時の杯を縁まで満たしたとき、都と聖所は戦争の終わりまで荒れ果てたままではなかった。1798年、その踏みにじりの『終局』において、教皇制が致命的な傷を受けることが『定められて』いた。その後、ユダヤ人が三つの勅令のもとで文字どおりのバビロンから出て来たときに予表されているとおり、都と聖所は回復され、再建されることになっていた。

その戦争の終結に至るまで、エルサレムは教皇権によって踏みにじられることになっていた。二千三百年の中に区分される諸期間を構成する預言的諸期間は、七十年の踏みにじりの幻と聖所と軍勢の回復の幻との関係が理解されるときにのみ、正しく理解されうる。モーセの呪いによる散らしの幻を退けることは、集めの幻を退けることにほかならない。七十年の幻は散らしの幻である。二千三百年の幻は集めの幻である。七十年の幻は散らしの「chazon」の幻であり、二千三百年の幻は集めの「mareh」の幻である。

それゆえ、神が結び合わせたものを、人は引き離してはならない。マルコ10:9

その二つの幻は預言において結び合わされており、一方を退けることは両方を退けることに等しい。この事実は、アドベンチズムが二千三百年の預言を堅持していると主張して

いるにもかかわらず、彼らがアドベンチズムの中心的支柱を、1863年に「七つの時」を退けたのと同様に、確かに退けていることを明らかにしている。ユダヤ人は神の律法を守っていると公言しなかつたらうか。古代イスラエルはメシアを待ち望んでいると公言しなかつたらうか。公言は、神の御言葉に従わないなら無意味である。

ミラー派は最終的に、1844年10月22日を二千三百日の期間の終わりとして特定したが、彼らの理解は限られていた。天の聖所と、その日にキリストが至聖所に現れたことに関する光が与えられたのは、大失望の後になってからであった。その日以後になって初めて、彼らは第三天使の使命と神の律法を見いだした。

主は二千三百年に関連した預言の光を増し加えようとされ、1856年にさらなる光への扉を開かれたが、その後の七年間でアドベンチズムはその扉を閉ざしてしまった。2001年9月11日以降になって初めて、主が預言を学ぶ者たちをハイラム・エドソンの論説へと再び導かれ、「七つの時」の光が再び増し加わり始めた。

二千三百年の預言と二千五百二十年の預言との関係を認めようとせず、アドベンチズムは1844年10月22日を未成熟で不完全な仕方捉えるようになった。

S. S.

Snowが十字架刑の日付を確定すると、その日付が1844年10月22日であることが判明した。

それゆえ、知り、悟りなさい。エルサレムを復興し建て直すとの命令が出てから、統治者なるメシアに至るまでが七週と六十二週である。広場も城壁も、苦難の時に再建される。六十二週の後、メシアは断たれるが、自分のためではない。来たるべき君の民が、その都と聖所を滅ぼす。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりに至るまで荒廃が定められている。彼は一週の間、多くの者と契約を堅く結ぶ。しかしその週の半ばに、いけにえと供え物をやめさせる。忌むべきものの蔓延のゆえに、彼はそれを荒廃させる。ついに終局に至るまで、定められたものが荒廃させる者の上に注がれる。ダニエル書 9:25-27。

ミラー派はキリストの十字架刑の正しい日付を突き止め、その後、二千三百年の期間の終わりが特定された。さらに、キリストが「契約」を確認した「一週半ば」における「メシアの断たれること」も、「忌むべきものはびこり」として表されているように、ユダヤ人が猶予期間の杯を満ち切ったために起きたものとして特定された。十字架は、「真夜中の叫び」のメッセージを認識するうえで不可欠な歴史的道標となった。

神の力のこれほど強力な顕現をもたらしたそれらの聖句に見いだされる光にもかかわらず、ミラー派は、二つの幻の関係を理解したいというダニエルの願いによって表されている、それらの聖句に対する理解には到達しなかつた。キリストが契約を確認したその一週は二つの期間に分けられており、後にシスター・ホワイトは、それが三年半にわたるキリストご自身の働きと、それに続く弟子たちに代表される彼の働きとを表しているのだと指摘した。彼らは、十字架という歴史的な道標が1844年10月22日という日付を確定するための錨となったことは理解していたが、それがまた、同一の三年半の期間二つの中心点を表していること、したがって「七たび」を表していること、そして神がモーセを通してそれを「彼の契約の争い」と呼んだことには気づいていなかった。

それゆえ、わたしもまたあなたがたに敵対し、あなたがたの罪のために、なお七倍に懲らしめる。わたしはあなたがたの上に、わたしの契約の仇を討つ剣をもたらす。あなたがたが自分の町々のうちに集められるとき、わたしはあなたがたの中に疫病を送る。そして、あなたがたは敵の手に渡される。レビ記 26章24、25節。

キリストが多くの人々と契約を堅く結んだとき、それは、彼が不従順なユダヤ人を相手にその契約をめぐる争っていた、その同じ契約であった。「彼の契約の争い」は、紀元前723年、アッシリアが北王国を捕囚にしたときに始まり、その後一千二百六十の預言的な日数のあいだ、異教が民族としてのイスラエルを踏みにじった。その踏みにじりに続いて、さらに一千二百六十の預言的な日数のあいだ、教皇制が霊的イスラエルを踏みにじった。

二千三百年の幻が成就する中でキリストが契約を確認された預言の一週は、同時に二千五百二十年の幻も象徴していた。ミラー派は、二千三百年の預言について「真夜中の叫び」のメッセージを正しく告げ知らせることができる程度には理解していたが、第九章におけるガブリエルの解釈が伝えようとしていた光の一部を、拒むことを選んだ。

ガブリエルはダニエルに、「matter」と「vision」として表される二つの幻を正しく分ける（心の中で区別する）ように指示したが、その勧告の成就として、七十週（「七つの時」の象徴）と二千三百年との関係を理解しようとするところこそがダニエルのまさに重荷であったのだと、ホワイ夫人は私たちに知らせている。

「七つの時」を退けたことにより、アドベンチズムは、二千三百年から切り分けられた最初の四百九十年の期間が、モーセが「彼の契約の争い」と呼ぶ、契約に対する反逆を表していることを理解できない立場に置かれた。

彼らはまた、週の半ばの十字架刑が単に日付を特定しただけではなく、契約の血をめぐるイスラエルの不従順に対するキリストの論争の核心そのものを示していたことを認めることを妨げられていた。彼らは、十字架で多くの人々のために流され、彼の契約を確認していたその血が、レビ記二十五章と二十六章に示されている契約もまた確認していたという事実、盲目であった。

古代イスラエルは、「主が仰せになったことはすべて、私たちは行います」という自らの宣言をもって契約を定義し、その契約を自分たちに負わせた。しかし、キリストが提示しておられた契約は、御自分の律法が心に書き記されることを要件としていたことに、彼らはまったく気づいていなかった。契約の条項に関する彼らのパリサイ的な定義が、彼らが真の契約を理解し受け入れることを妨げた。

現代イスラエルは、週の半ばにおける十字架の血を、メシアを退けて「私たちにはカエサルほかに王はない」と宣言したとき古代イスラエルを覆っていたのと同じ盲目を現代イスラエルにもたらすような仕方で定義している。

現代のイスラエルは、ガブリエルがダニエルに示した歴史には、契約の確認だけでなく、その契約を拒む者にもたらされる離散も含まれているという事実、盲目である。というのも、これらの節は、異教ローマ（やがて来る君主）が都と聖所を滅ぼすこと、そして聖所と軍勢を踏みにじったその戦いの終わりに至るまで、「荒廃」が複数形で定められ

ていたことを示しているからだ。

キリストが多くの人々との契約を確認するために血を流された歴史において、異教ローマと教皇ローマという二つの荒廃させる勢力が明確に特定されている。十字架で流されたその血こそ、キリストが天の聖所にもたらされるものであり、二千三百年の「mareh」の幻により表される御業の象徴である。その歴史は、聖所と軍勢を踏みにじる二つの荒廃させる勢力によって表される、二千五百二十年の「chazon」の幻の歴史と織り合わさっている。

ミラーの夢で宝石として表された真理は、太陽のように明るく輝いていたが、不完全であった。終わりの時に、「真夜中の叫び」が一字一句そのままに繰り返される時、まさにその宝石は「ほこり払いの男」によって新しく、より大きな宝石箱に投げ入れられ、するとそれらは当初よりも十倍も明るく輝くようになる。これらは最後の「真夜中の叫び」のメッセージの試金石となる。その宝石は、ハバククが預言した二人の証人、すなわち表によって、明確に特定された。1843年と1850年の開拓者の図表の二つの表を「行に行を重ね」て重ね合わせると、ミラーの宝石が明確に特定され、そうすることで、それらの宝石は最後の「真夜中の叫び」のメッセージを表すことになる。

二つの図表に載っている真理の大半は、1844年以前に成就した預言を示しており、たとえばダニエル書7章と8章の獣の同定がある。ダニエル書2章の像も表されている。その幻を確立するのがローマなのかアンティオコス・エピファネスなのかという議論もある。最初の失望と、ハバクク書および十人の乙女に関する「遅れる時」もある。第三の天使の到来も、天の聖所もある。「常なるもの」が異教の象徴として示されている。そしてもちろん、イスラムの三つの災いもある。これらを合わせて見ると、ユダ族の獅子が預言の真理の封印を解くときに起こる「知識の増加」を表す図解となっている。

1798年の終わりの時に封印が解かれた預言的知識の象徴としてのウライ川の幻についての考察を締めくくりにあたり、その知識が増し加わってウィリアム・ミラーの夢に現れる新しくより大きな宝石箱を満たす宝石となったことを踏まえ、私たちはミラー派の歴史において未完成であった諸真理を再検討する。いくつかは、ミラー派が生きていた当時の時代状況のゆえに未完成のまま残され、また別のものは、第三の天使の前進する光に歩調を合わせることを拒んだ者たちの不従順によって未完成のままとされた。

これらの内容は次回の記事で続けます。

神がメッセージを託して遣わされた者たちは、ただの人間にすぎない。しかし、彼らが担うそのメッセージとは、どのような性質のものなのか。神が何が好ましいかについてあなたにご意見を求められなかったからといって、その警告から背を向けたり、軽んじたりする勇気があなたにあるというのか。神は語る者、大声で叫び、遠慮なく告げる者を召しておられる。神はこの時のために、ご自身の働きをなすべく、使者たちを起こされた。中には、キリストの義のメッセージから目をそらし、真理のメッセージが望ましいだけの優雅さや洗練をもって語られていないという理由で、その人々と彼らの欠点を批判する者もいる。「彼らは熱心すぎ、真剣すぎ、断定的すぎる」と。こうして、多くの疲れた、虐げられた魂にいやしといのちと慰めをもたらすはずのメッセージが、ある程度、排除されてしまう。というのも、影響力のある人々が自分の

心を閉ざし、神が語られたことに反して自分の意志を立てれば立てるほど、彼らは、光といのちを吹き込む力を切望し祈り求めてきた者たちから、その一条の光を取り去ろうとするからである。キリストは、ご自分のしもべたちに向けられた冷酷で高慢で嘲る言葉を、みずからに向けられたものとしてすべて記録しておられる。

第三天使のメッセージは理解されず、その栄光によって地を照らす光は、その進みゆく栄光のうちを歩むことを拒む者たちによって偽りの光と呼ばれるだろう。真理を拒む者たちは、その不信のゆえに、本来なし得た働きを手つかずのままにしてしまう。真理の光に反対するあなたがたに懇願する。神の民の行く手から退いてほしい。天から遣わされた光が、澄みわたり、絶え間ない光線として彼らの上に輝き出るのを妨げないでほしい。神は、この光を受けたあなたがたに対し、それをどう用いるかの責任をお求めになる。聞こうとしない者は責任を問われる。というのも、真理は彼らの手の届くところにまでもたらされたのに、彼らは自分の機会と特権を侮ったからである。神の権威の証しを帯びたメッセージが神の民に送られてきた。恵みと真理に満ちたキリストの栄光と威厳と義が示されてきた。イエス・キリストにある神性の満ち満ちたさまが、美しさと麗しさをもって私たちの間に掲げられ、偏見によって心を閉ざしていないすべての人の心を魅了してきた。神が私たちの間でみわざをなされたことを私たちは知っている。私たちは、魂が罪から義へと向き直るのを見た。打ち砕かれた者たちの心に信仰がよみがえるのを見た。私たちは、清められたのちそれぞれの道へ去って行き、ただ一人だけが神に栄光を帰するために戻ってきた、あのらい病人たちのようになるのだろうか。むしろそのいつくしみを語り、心をもって、筆をもって、声をもって神を賛美しよう。レビュー・アンド・ヘラルド、1890年5月27日。